

[書 評]

Ivancsó István

*A magyar görög katolikus papság szentelési emlékképeinek
gyűjteménye (1914–2007)*

(『ハンガリー・ギリシア＝カトリック教会の、
司祭の叙階に際しての記念状の集成』 1914–2007)

Collectanea Athanasiana V. Varia vol.2

Nyíregyháza: Szent Atanáz Kiadó

(Görögkatolikus Hittudományi Főiskola kiadója), 2016, pp.322,

ISSN: 2416-1799, ISBN: 978-615-5073-36-6, 197 × 278 × 24 mm, Ft3000.

秋 山 学

本書の著者イヴァンチョー・イシュトヴァーン神父（1953-）をめぐり、筆者は本誌第48号（2006）所収の「研究動向：ハンガリーにおける教父学研究」の中で、わずか10行余りではあるが紹介したことがある。それ以来10年以上が経過し、神父が所属するハンガリーのギリシア・カトリック教会（ビザンティン典礼と東方教会法を守りつつローマと一致するカトリック教会）にも変化が生じた。本号で取り上げる師の新著についても、同教会の歴史と変化を背景に理解する必要がある。

そもそも、教父学ないしスコラ哲学の専門誌である本誌において、ハンガリーのギリシア・カトリック教会についてのこのような題目の書を評することに、疑問が呈されるかもしれない。けれどもギリシア教父研究は、ビザンティン典礼のかなり専門的かつ実体験に基づく知識なしには成立しないうえに、トマス・アクィナスやボナヴェントゥラが微妙に関係した第2リヨン公会議（1274）や、古典学者・哲学者ベッサリオン（1403–72）らが議決のために奔走したフェッラーラ・フィレンツェ公会議（1438–39）における教会合同のための決議事項に、近世以降最も忠実に従ってきたのは、拙見によればハンガリーのギリシア・カトリック教会である。その理由の一つは、第2ヴァチカン公会議（1962–65）以前以後を問わず、中東欧の周辺諸国がいずれも典礼言語として教会スラヴ語を自由に使用できたのに対し、ハンガリーの同教会では、公会議終了まで古典ギリシ

ア語が典礼のための公的言語として指定されていたという点にある。ローマ典礼教会の慣例であれば、われわれは比較的容易にその実態を捉え得る。しかしながらビザンティン典礼に関しては、上述のように実体験が必須であるにも関わらず身近には接し得ないという理由により、われわれは無意識に敬遠しがちである。けれども、まずわれわれに両典礼教会の決定的相違として映るのは、妻帯者が教区司祭に叙階され得るか（ビザンティン典礼）、され得ないか（ローマ典礼）という点であろう。よく誤解される点であるが、ビザンティン典礼では「妻帯者が叙階を受けられる」のであって「司祭が結婚してよい」のでは決してない。したがって、独身者のみに許される司教への叙階の可能性を後に控える者以外、ビザンティン典礼の教区司祭は、教会法の規定に則り、叙階の秘跡以前に婚姻の秘跡を済ませる。それゆえ本書のように「歴代教区司祭の系譜」を克明に跡づけた書であれば、そこに辿られる歴史の背景に、当該の教区司祭を支えた夫人や子供たち、つまり家族の存在を明瞭に感じ取ることができる。ギリシア教父のうち、おそらくニュッサのグレゴリオスを初めとして妻帯司祭は何人か存在するものと思われ、本書から得られるものは、そのように教父・使徒時代にまで遡るに違いない。

さて「ハンガリーのギリシア・カトリック教会」とは、まずその淵源を1646年のウングヴァール（現ウクライナ領・カールパートアールヤ内ウジュホロド市）教会合同に遡る。つまり同教会は、「国を持たざる民」であるが故に「ギリシア・カトリック教会」を民族の精神的支柱としてきた「ルスイン（ルテニア）民族」のうち、1920年のトリアノン条約によって現ハンガリー国内に残された地域に居住する、ビザンティン典礼に従うカトリック信徒たちを意味する。初めてルスイン教会が司教区を持つのは、1771年のムンカーチ（現ウクライナ・ムカチェヴォ）司教区が設立された時であるが、ハンガリー語を母語とする信徒たちは、典礼言語としてのハンガリー語の認可を優先させて使徒座に請願してきたため（これは上述のように1965年まで結実しない）、ハンガリー人のためのビザンティン典礼の教区としては、1912年にハイドゥードログ司教区が設立されるのを待たねばならなかった。現ハンガリー国内で考えるなら、総人口約1000万人のうち、ローマ典礼カトリック信徒は約600万、そしてギリシア・カトリック信徒はおそらく約30～35万人規模だと思われる。ルスインの人々は、カールパートアールヤ地方そしてスロヴァキア国にも居住するが、トリアノン条約まで同地方および同国はハンガリー領であったため、ルスイン教会内には現在なお、同地方南西部および同国南東部を中心に、ハンガリー語を母語とする信徒が健在である。

2019年1月時点での現状から言えば、ハンガリーのギリシア・カトリック教会は、同国東部の中心都市デブレツェンに近いハイドゥードログに首府司教座

を持つ（2015年3月司教区から首府司教区に昇格：首府司教はローマ典礼での大司教に相当。現首府司教はコチシュ・フュリュップ師、2008年6月着座）。同首府司教区下には、2015年3月新たに設立されたミシュコルツ司教区（現司教はオロス・アタナズ師）、および2015年10月新たに設立されたニーレジハーザ司教区（現司教はソチカ・アーベル師）が置かれている。ただしこれらを含め、ハンガリー国内のギリシア・カトリック教徒はすべて、2007年11月までハイドゥードログ司教区（当時）の教区長であったケレステス・スィラールト司教（1932-）の代には、同司教が一人で管轄しておられた。イヴァンチャー師は、このスィラールト司教の在任期間中、同司教から全幅の信頼を寄せられていた方であり、現在なおニーレジハーザに置かれている同国ギリシア・カトリック神学院の典礼学主任教授を務めるとともに、同神学院に併設された司祭養成院においても、長らくレクトル（管長）ほかの地位にあって、次代の司祭を養成する任に当たって来られた。なおイヴァンチャー師は2004年から2014年まで、ローマ教皇庁立国際神学委員会のハンガリー代表委員を務められた。同ポストに関して、前任者は教父学者のヴァニョー・ラースロー師（1942-2003）、後継者は典礼学者のドルハイ・ラヨシュ師（1953-）であるが、両師ともローマ典礼に属している。ハンガリーはこのように、東西の典礼が邂逅する国でもある。

さてハンガリーのギリシア・カトリック教会では、叙階式を迎える日および初めて聖体祭義を挙行する日を記念して、司祭は両日の日時と場所、それに聖書あるいは典礼文から採られた聖句（モットー）を印刷し、裏面にはイコンを掲げハガキ半分大ほどの「記念状（カード）」を作り当日の参列者たちに配布する、という習慣を持つ。本書は、1912年に設立された上掲ハイドゥードログ司教区の設立以来蓄積された各司祭の「記念状」を、司祭被叙階の順序に並べたものである。上に記した「聖体祭義を初めて挙行する日」は、慣例上 *primícia*（「初祝」；「初ミサ」と同義）と呼ばれるが、本書に収録された記念状は、総計488枚分におよぶ（ただし464番に載るニラン・ヤーノシュ師は、優れた典礼学者であるが、助祭への叙階のみを願ったため空欄のままである）。続いて叙階後25年目には *ezüstmise*（「銀祝ミサ」）、同じく50年目には *aranymise*（「金祝ミサ」）、さらに60年目には *gyémántmise*（「ダイヤモンド祝ミサ」）、65年目には *vasmise*（「鉄祝ミサ」）、そして70年目には *rubinmise*（「ルビー祝ミサ」）が用意されていて、それぞれ本書での該当者数は、銀祝が342名、金祝が110名、ダイヤモンド祝が33名、鉄祝が12名、ルビー祝が6名となっている。もっとも、彼らに関して記念状の公布・収集率は100%に届かず、順に初祝が84.18%、銀祝が72.12%、金祝が82.35%、ダイヤモンド祝が66.66%、鉄祝が55.55%、ルビー祝が16.66%の収集率となっている。収集が不可能であった箇所は、いずれも該当する司祭名の下にスペースが確保され「？」が付されている。

本書の18頁から49頁にかけては、1912年ハイドゥードログ司教区の設立後、1914年7月の叙階式で誕生した司祭に始まり、2007年8月に叙階された新司祭に至るまで、司祭総計488人の名前・誕生日・被叙階日・初祝日、聖句と典礼句が順に挙げられた後、銀祝以下に該当する司祭には、初祝の場合と同様、銀祝以降に際しての聖句と典礼句が挙げられている。次いで物故日・叙階した司教、さらに最右備考欄には、修道者の場合（主に聖バジリオ修道会 OSBM）であれば所属修道会の略号、学位取得者には Dr. が記されている。これらはニーレジハーザ司教区の司祭叙階台帳に基づいたとされる。

本書によれば、ハイドゥードログ司教区は設立以来、順に初代マイクロシー・イシュトヴァーン司教（在位 1913-37）が kispap（「小神父」；ハンガリーでは司祭候補者をこう呼ぶ）計 109 人を、第 2 代ドゥダーシュ・マイクロシュ司教（在位 1939-72）が計 161 人を、第 3 代ティムコ・イムレ司教（在位 1975-88）が計 41 人を、そして、まずこのティムコ司教を補佐司教として支え、同司教の没後第 4 代司教となったケレステス・スィラルト司教（在位 1975-2007）が計 150 人を叙階した。この間、1912 年からカナダのウクライナ・カトリック司教であったニケタス・プトカ司教が計 3 人を、また初代司教着座の前後に使徒座管理者であったバップ・ Antal 司教が計 6 人を、またドゥダーシュ司教とティムコ司教の間、クロアチアのクリジェフツィ司教（在位 1963-84）であったセゲディ・ヨアヒム司教が計 11 人を、また 1974 年に司教となりヴァティカンの東方聖省長官を務めたミロスラフ・マルシン司教が計 6 人を、それぞれ叙階している。

こうして本書は、第 1 次大戦直前から 21 世紀初頭・スィラルト司教までのハンガリーのギリシア・カトリック教会の足跡を、「記念状」という極めて生活に密着した資料から跡づけた名著となっている。イヴァンチャー神父は評者の留学時の指導教員であるが、評者がローマの東方学院ではなくニーレジハーザの神学院を選んだことに関連して「ハンガリーには *élő közösség*（活ける共同体）がある」と仰っていた。古代に淵源を有する「活ける共同体」の肉声を記した本書を、広く推薦したい。